

結論 以上の調査結果と考察から、アジモ場の形成には漂砂が強く関係していることが確められた。すなわち年間8cm以上の底砂の堆積の変動がある場所では藻場は形成されないし、3cm以下の変動であればアジモ場は安定して形成されるものと結論される。

本県内にみられる珊瑚内海域の中では、上述のように比較的静おんな本調査漁場においても、漂砂があり、その堆積や逸散による海底地盤の変動がみられ、アジモ場の形成と分布を制限している。

このことから一般に珊瑚礁内海域におけるアジモ場の造成適地の選定の一基準として漂砂等の有無あるいはそれをもたらす季節風等の影響を排除する地形的要因を予め考慮することが必要であると結論される。

2) アジモの移植試験

目的と方法 昭和49年度には、礁湖への移植試験と併せて、干潟の掘削池（以下単に試験池とする）における移植試験を行ったが、後者において移植草の生育が比較的長期間認められた。

そこで本年度も試験池への移植によって、アジモの生長と定着の可能性を検討することにした。

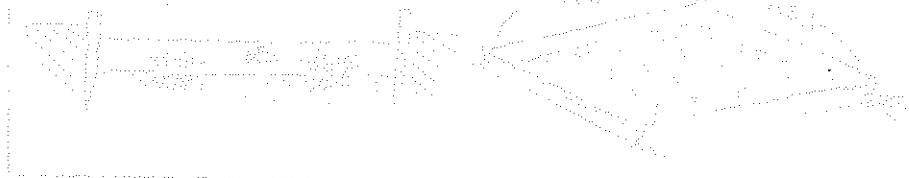
試験池の数は6、構造および配置は図-6、7に示すとおりである。1~3、6号の試験池は砂質帯の中であって、池内への砂の堆積や池外への砂の逸散がみられ、移植地盤はかなり不安定である。51年2月7日の調査では6号池は全試験池中、砂礫の攪乱の跡が最も大きかった。これにくらべ4~5号池は安定している。

試験池はいずれも干潟にあるけれども、常時10~20cm以上に滞水している。

植えつけの方法について、49年度はスコップでモ場のアジモを土砂とともに掘りおこし、1試験池当たりその4把分を移植した（以下この方法を芝植えとする）（図-7）。

芝植えについては50年6月12日現在1、3、6号池において、なお移植草は生存しているので引き続き観察した。今年度は長さ5~10cmの根茎のついている株を選び、その1株ずつをこぶし大の礫にポリエチレン製の紐で結着し、1試験池当たり16~25株ずつ移植した（以下この方法を株植えとする）（図7、図版Ⅲ-1、2）。

移植草の種類はリュウキュウスガモとベニアマモである。



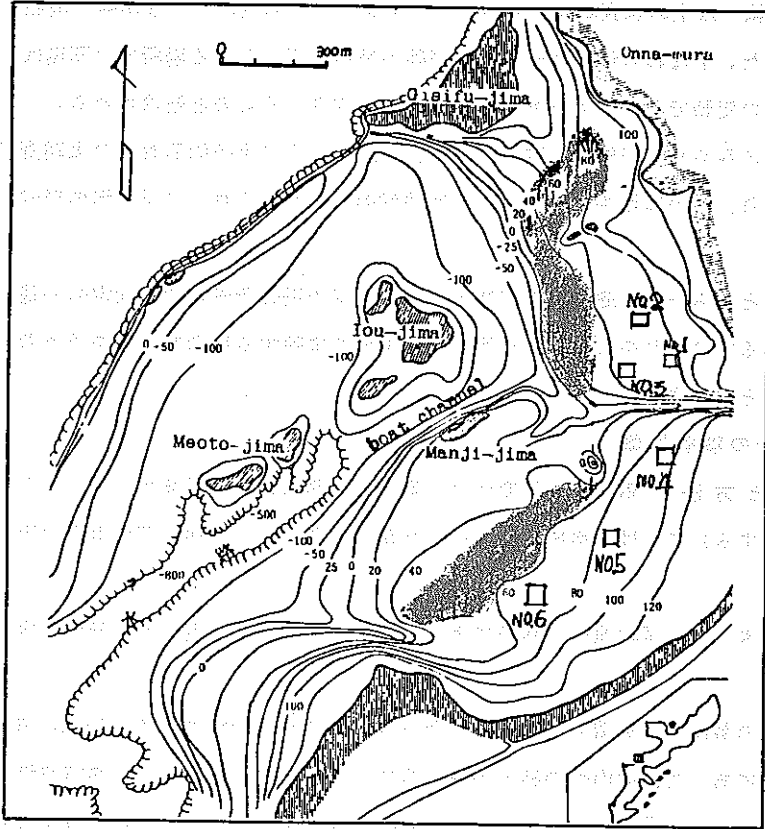


図-6 堀削池の配置 □：堀削試験池 ○：アジモ場，
数字は潮位の基準面よりの高さ cm

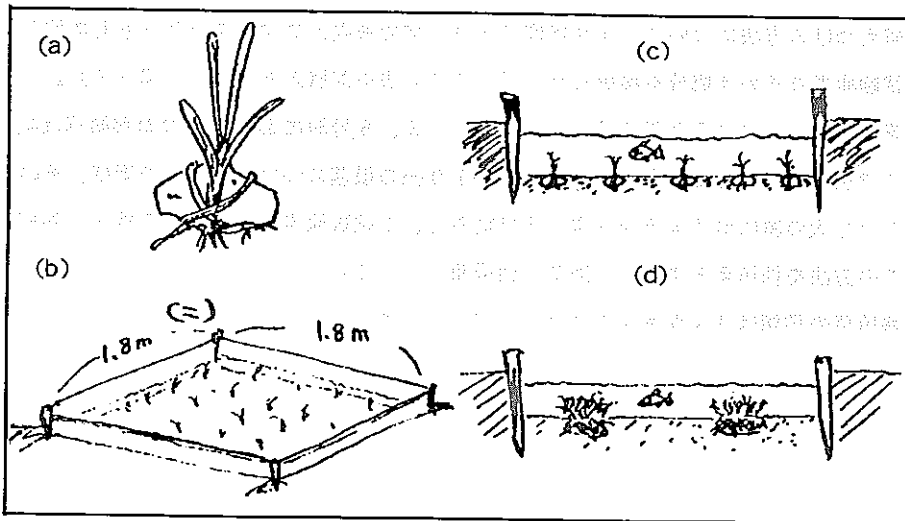


図-7 アジモの移植方法

- (a) 礫に結着したアジモ (株植えの移植草) (c) 株植えの植え込み方法
 (b) 試験池の大きさと移植草の配置 (d) 芝植えの植え込み方法

結果 結果は第2表に示した。

(1) 株植えの経過

50年8月18日(移植後およそ2ヶ月)にはいずれの試験池においても株数は当初の $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$ 量になっている。根茎の伸長や葉部の生長はみられない。葉の先端部が切れ、どの試験池においても、移植草は萎縮したようになる。

51年2月7日には5号池に4株を残すのみとなり、他の試験池では株植えの移植草は消失している。

第2表 移植数と生残株数 () は芝植え株数

試験池 No	49 JUL 11	50 FEB 8	50 JUN 12	50 JUL 8	50 AUG 18	51 FEB 7
1	(4)	(2)	16 (1)	10 (1)	8 (1)	0 (1)
2	(4)	(1)	25 (0)	20	10	0 (0)
3	(4)	(1)	21 (1)	17 (1)	6	0 (1)
4	(4)	(0)	25	20	7	0 (0)
5	(4)	(0)	25	21	6	4 (0)
6	(4)	(2)	(2)	(2)	(2)	(0)
備考	芝植え移植	くすんだようになる	株植え移植	No.1-3 砂の攪乱の跡著しい	左に同じ	根茎の伸長がある No.1, 3 で最長50cm No.5 で最長16cm

しかし、5号池の4株にはそれぞれ根茎の伸長がみられ、その長さはそれぞれ16、12、11と2cmである(図版Ⅲ-8)。このように、この時点で葉部の存在が認められる移植株に新しい根茎の伸長がみられる。それに対し大部分の移植株は基質の礫とポリエチレンの紐を残すのみとなっている。このことから、この時点で葉部が残り根茎が伸びた4移植株を定着したものとすれば定着率は4/112(≒4%)である。

(2) 芝植えの経過

50年2月8日の観察では根茎の伸長はどの試験池でもみられず、また草量もむしろ少なくなっていることは前年度報告書で報告した。

50年6月12日には6試験池中全く消失している試験池が3、残りの3試験池すなわち1、3と6号池において、当初移植草のおよそ $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{2}$ 量に減っている。

50年8月18日には移植草量は変わらず、また広がる様子もみられない。

51年2月7日には1号池と3号池の移植草において、根茎の伸長がみられる。1年7ヶ月で根茎の最大伸長はおよそ50cmである。6号池では移植草は消失している。池内外の砂礫の攪乱の跡はこの時点では他のどの試験池よりも6号池において大きかった(図版Ⅲ-5、6、7)。この時点における芝植えの株の定着率は、2/24(≒8%)である。

結論 以上の結果から移植草の消失は大部分砂礫の堆積と逸散によってもたらされる枯死或いは流失の結果であることがこの移植試験において確かめられた。

しかし、最も地盤が安定していた4号と5号試験池において、芝植え移植草の消失が早かったこ